玄從心得草後編

上

口 g
1540
3

口七9
1640
3

主持ぬ身ハ心安き採思へるハ大ひなる誤也人と云く君臣の位ふき者一人なふし一國一郡の主ハ天への奉公也其下ふ住者ハ皆家来也父ハ祖那ふ云く女房子供ハ家人也祖先祖ハ主人ふ云く子孫ハ家来也其家の一代〳〵ハ祖先祖より番頭を仰せ付るまさり臣の職をよく勤〳〵一切の財寶を子孫へ送るべし

平かふ

主從心得草後編

上下二冊

繪入

東都下谷金杉

天保十四卯七月　壽福軒述

壽福軒

宮城文庫

自序

○此本ハ奉公人の有増在云ると。大間違ひの所ハ其道ふかゝ〳〵こと人補ひ知へ。又年季奉公ふ御仕着噺とらハ本壹冊ひとと云。取所ひろ又取ざる所ひろく。九ふ用ひざ〳〵。其本の趣意を以て。十八丁迄ふ云ると。其余ハ拙ぶ見聞の事を云ると。文字假名遣ひ等の相違ハあげてかぞへざ〳〵。又道理ふ當ぬ事も多ぬべし〳〵是ハ遠國より今參りの人近郷ふ這出の丁稚飯焚の者ふ云へ語り聞せて前車のろがべる在見て。後車のいましめとせんぶ爲也。其外在思ふ。

門の和等達の已。披見云く。他輩の披見在ゆるさず

○學記にいはく。玉琢うざまむ器とあらざれば。人學むごまざれば。道を知らざるとなり。道を知らざれば。善とあれ。行ひがたし。道を善つ
とも居とくさへ。行ひがたし。況や善とあれば。猶行ひがたし。
よき道を善とも。よき行ひをなさべし。福德安公の田地
に到る事疑ひなし。たとひ何本をよむ共。我身の脩めゆう
家を齊へる處の急所を公に留とよむべし。命と共真急所
に公を解とよむ人は。只輕口の面白き所むうを好む
人多し。是は作者の本意にはあらざる。作者の本意は身を
よく脩め家を齊へるにあるよき事はあらざる是を取て以て行おこん
とする人がなしき者也。何本をよむ共我身の爲にある事

を考へ出さんが爲也。聖經諸子百家の書は中に及むで假名
本に至る迄。皆身を治め家を齊へんが爲の道具也よき
道を善とも此世を安公にしらるべし
○此本は主從とかいへ共。主從の事むうにはあらざる邑く
樣々の事はあらとなく人はあらざる。夫に間違迄。拙が主從の事
むうに認こけを共夫に理屈むうにあらざる愚人は
退屈者とよまざる時は。かきる詮也是は愚人
むうにあらざるよまむ愚人のよむにあらざるなり
なり夫故に注口にあらざる事是。俗町人百姓は本を讀む
主從の事をよく考べし。又三へんよむ主從心得に有べく

事口傳の事ハなをび見えく篤と勘へべし。人とまとく人を使ひ人ハ仕まる事を知〳〵ぞんむよき人といひぐし。是ハすべて主從の事ハよく心得ぞんむひるべか〳〵ず。身を脩め家を齊へるの根本也。深〳〵考へべし

天保十三寅歳四月天赦日

東都下谷金杉

壽福軒眞鏡述

東京都立中央図書館

上之巻目録

一幼少の時奉公ハ出るハ三ッの品ひる事　四丁
一摺那とらハ文字のかうまやく　十一
一奉公ハ出るハ。喜樂愁の三ッひる事　十二
一奉公人ハ三ッの不思儀ひる事　十六
一短冊紙や色紙虎屋の五種香賣の事　二十
一いづまこの家もあまり者ろんもく者多き事　廿四
一若ひ者ハ歌仙飛上るぎひと風の事　廿五
一主人ハ向ひうそ傷りをしハ安ハ油断すべくもぢとハ支　廿八
一村田一流大店向月ハ一ハん宛掟をよミきかせる事　廿九

一江州勢州等の國々より奉公人出る事　三十二
一奉公をよくつとめ番頭となり中登りする事　三十五
一一切の奉公人衆遠方の東都へ何者か来ることゝ成る　三十七
一八瀬大原等の乳呑子育くみの事　三十九
一親ハ子の悪をあらぬ事司馬温公家訓の事　四十四
一神主の子息神勅と偽例と親父をたぶかる事　四十八
一今の世ハ色例ついよりも先ハ女房とらハ事　五十
一今時の女ハ我手ハおもらろ育るとらハ事　五十一
一出来合の夫婦因縁いろ〳〵古事来歴の事　五十四
一目ハついと世房今ハ鬼ハつきとゝのかろる事　五十七

主従心得草　後編上

初歩の時奉公ハ出るハ三ツの品ハる事

○一ツハハ親貧窮おて養育する事ハ孝行ハ我身の為の事なり。二ツハハ家奉公ハ出すハ孝行ハ是ハ親の為我身の為の事なり。三ツハハ家貧しかゝ孫芸兄弟多くおて未くそろく者。所詮もハけをゝ。奉公ハ出る見ハ我身の為也。三ツハハ何一ツ不足ハハけを芸。親の元ハ憂ひつゝい事を者ゝ。人のハんぎの思ひ寄ハ甚家の[illegible]とハ成り時人をひ者も行届ゝ甚上おごりの心も出るの有ハ修行の為ハ奉公ハ為ハ成り。是ハ家の為ハ成る

主人
お代調市

上中下三人のお供和て、
まくら一所に寄合て
まくらするうち、又貪るよりてふけと
ども、殊外多くしてまくらするうち、
又猫猫ふと共、俄かのためふまくらするうち、

奉公也。右三ッの品ハかくし芸同じ事公ふ志て。主人も見け
目だてぬし。右三ッの内一番つとめ安きハ貧乏ふてまる
事公也。其訳ハ長き年月の事なに至りてうひつらい
事なり。又服の立事も間〻なる者也。いとまをとりて出
もやせんと思ふ事も度〻也志かし芸。其時思ひ廻して見れ
ばいや〳〵今内へ帰りて。貧苦をし又両親ふ苦労をかけ。
我身も寒ひめひだるい目を志やうよりハ。辛抱をし堪忍を
志てつとむるがよいとあきらめるなれば大きにつとめ安し。又ハ
奢りの心出る時ふも。國元の貧窮を思ひ出し。むでの吳
里いする場がなるなよ大きにつとまるなりいげを

の奉公人も主人の恩ふ厚なれバけもし芸。別志て是等の
奉公人ハ。朝夕主人を大せ志て勤めたらむまく我身の仕
合よかるべし。若おごりの心出来て主恩をおろそかふせバ。
たとひ奉公をつがるなくつとめぬけても。天罰ふて病氣其
外災難来川てまて立身も覚束ふし賤む目しく。
又右の條々奉公ハ。孫のおつとめがとし。右よひなうひつら
いめ服の立事探なる時ハ。ぬもく内ふ居るふわるが。擅那様
ふて居るべきよかやうなるうつらいめふかの事かといぞ
ふげきの增長する者也。まそ又をころへるかるまて大きなつと
めがたし。又おごりの心出し時ハまでのるるよ引合へ志ても。

親えより債よ分の幸と。ふまけ安き業をこそ名る
だけ大きなつとめよく。是同じ事なれて辛抱の孝落
かひる幸也。右貧乏なれて奉公する人ハ。朝夕親えの貧苦を
哀まぬ者ハすべし。是専要の幸也。是さへ哀まぬ者ハ辛
抱も堪忍も出来て出世する事疑ひなし。又俗形まなの
人ハ親えの有福を羨まて思ひ為ろ。ふつゝ哀まて
つとむべし是大切の幸也今ていつゝいめの俗形ハ人の
為ハ為ぬ。皆我身の為也。此事をよく考へて上を敬
ひ下の雑儀をあらて是を哀まず。且那とあらし時我身の
おごりをやめて下の雑儀をすくはんとの心悲ハを起を

為し。親えの困窮ハ孝をかけ。皇ふ拵うけて孝なをのこを
べからず。貧乏の子孫と同じ。安らハ朝ハ孝ふく為し。又
武家の奉公ハ。楽をの中ハ元色を去。万事油断あらず
少しの言葉ふの間違ひ。軽違ひ者ても。不容易調法とふつ
て。遠慮ハ関門喜変ハひとまの知るもあり。大小の仕業ハ対
し引ハ引を始末よて。是非ふく命ふ為ハ孝行ハ孝を
者也。又筆ハ勿論。文くの藝道も。身分相應ふ為ハ
ふけを。武士ハ孤とりの者ハり。是学を覚悟し彼是
の孝をひ。中くもしスも愚ろ也。商家の奉公ハ外ふ何も
きひふし。少しの間違ひ間違ひ等ハ町家のかとどけ

ふさわしからず調法とすることなしよって渋茶也。ひのきの孤ふる越度ふもあらぬ者也。又義用等なる。商家の事ふまたひのきの習ふまた芸。生来る者也。其外他所高ひの入組ふる義用事ふ拵ふ知りたるやどの事ふかけまた芸。あまり去らず芸随分と間ふ合者也。ふ跡拵ふ日記賞上書出しさへ生来また。不自由もふく変旨者也。商家のふ代拵能書ふて万事ふ立入たる人ふ。十人ふ九人迄ハ。と去ゆくふて。所ふの事ふを麁略ふまる者也心ふる人ふあまりやめぬ者ふて。予も世間をひろくふるふ商家の主ふ拵ふ。万事ふの慰しふふ拵ふよく。かき。かうよう拵かく人ハ。大方ハ身上全く持とげぬ者ふて。親ふより由づりの家屋鋪拵も家質ふて。立流ふ借用證文拵かく人を多く見たり。其景ハ町家のかき役。又ハ名主のふ代宿屋の下代等ふふる者多し。又世間の全持をふるふ大方ハ悪筆ふ去てふ紙拵も完字まゝ。ゞりの不文言も結句奥床ふ見ふる者也。是等ハ。悪筆不文言の孤奪ハ白ふべの光澤よく筆ふ土蔵の數のふへるふて考ふべし。是を以て考へふる。万藝ふ達し。能書能文の人よりもまるかふ。其ふ高し依て奥床しきとゝふ筆也。巻角不しき物ハ全ふり。人の命を助るも全。人の命を捨るも全。人をふつけふびふも全。人と不

通ずれとあるも全く故ふ用ひゆうこと用て大事ふり。拙
上くの寶ふまと芸。悪鋪用ゆる時ハ甚ご笑ひをふすりの也。
全持こる人ハ善人ふても。惰しきたふしと誹らまるふ者也。
心得ひるべし。人ふも逃こまざと。全をも方とためんと両方
よきやうふハゆうぬ者也。可愛がこまて貪するよりも憎
ままてもそしらまても。全持たる方ガ勝也。さまと芸智恵弐
覺ふてハ。全ハたまこぬ者也。全ためるふハ口傳ひり信の一
字也。一字さへとふさず守りふかけて居る時ハ。全狼も
自然とたまりて悪事災難を除き。人ふよく用ひらまと。何
ふても至こ事叶ふずとの事ふし。人間一生ハ信の字

へ持て居まと。父母ふまて忠孝をふし。威ふくまて諸
人ハ敬ふ。人間一生ハ勿論天地の間ふ。信の一字ふくまてハ万物
悉ひがこし。仁義禮智信の五常も。信の一字ふき時ハ仁も
えへずこうとふり。義もおやちてるふ似て。猶もけひたくと
こり智も貪欲うぬずまとふる

木　火　金　水　地

仁　義　禮　智　信

春　夏　秋　冬　土用

ひる人のいふく。仁まが勇を矢ひ義まが貪をする。
猶まび至こひとふる。智まがうををつく信ままび

馬庶とゐるとゐへりるゐ猶及ばざるがごとし。何で
も中道が誠のよい所也
右ゐて考ふべし。木も土ゐくてハ生ぜず。火も土より生ず。金
水も土ゐくてハ出る事ゐし。春夏秋冬の四季も土用ゐ
き時ハ春の暖氣来ゐず。夏の暑氣も
来ゐず。諸ゐの苗も生ぜず。秋冬も右ゐて考ふべし。四季の土
用ゐき時ハ。人間ハ勿論都て生ぜず。一年三百
六十日の内。土用七十二日ゐり。故四季ゐひゐゐず五季也。一季ハ七
十二日宛也。其内へ十八日宛土用を加へて九十日とゐる。土用十八
日を四ツ合せて七十二日とゐる是ゐて一年ハ五季とゐる也。又

誠を熱ゐも金のかまゐ水をいれて。木をくへて火を焚て
飯ハ出来る也。然ゐ共土のかまどゐけ共出来ぬ者ゐり。
土ハ信也。信の土ゐけ共。何事も成就しがゐし
事柄の後をいぐ共是も
一理ゐりとて用ゐべし

是信の土用ハ親指也。親指ゐくてハ箸
も筆も計も持ぜず。是ゐて信の入用
を考ふべし。又信の字ゐ分て種々の訳
ゐる事。又金をためゐ。近道秋事
口傳ゐを芸。長けを芸。変ゐひ尽
しゐ返てゐるす

別して商家の奉公人は世信の二字を首ふかけて。勤めさへ
とゝ主をいつゝき奉ハふき者也。夫奉公とハ主人へ身を
奉るとかひてなゝとよむ。奉のかゝぐふいつゝ不。主人
より頼りたるかゝぐ也。信ふき時ハ私の出来る者也。調市
飯焚とひへ共。信の一字を持て居る時ハ。ひまりもろき事
ハせぬ者也。なゝ人も私をたゝふとて。主人大事と勤る時ハ
身ふひ安きゝき事もふく。ふをくるむる事もふく。一生
安楽也已ゝ。ふ葛ふすゝなゝ身の破滅也主人の葛ふ
ゝる事なハ我身の葛とゝ得べし。若ゝ男ふハ身を男ふと
ゝふたとへの通り也。又擅那とゝふ文字ハ。主人二人の名ふ

てハふゝ。主人と家来と合せて擅那とゝふ。唐土の江南ゝ
ゝふ所ふ。擅とゝふハふひり世木の下ふ莇とゝふ草ひり。此草
を取て外へ植ても育たゝ忘ち枯るふり又擅の木も莇の草
ふき時ハ。是も又忘ち枯る也。右擅莇を一所ふ植まゝ。両方共
榮へる有ふ。主従合せて擅那とゝふ也。主人ひゝて家来
家来有ての主人也。又家来ふくてハ。主人と名有る者ふし

様楠正成公の御ふ公得たき者也。主従とハゝふけを
云。主ハ家来を主人と思ふべゝとの仰せ也。御ふ持で
ふくてハ大事の所用ふ立者ふゝ。此事ハ主従三へん下の
巻楠の所阿部大蔵の所を見て考ふ。又家来をちり

ひぐらしの如ふ男ふ女人の下ふ人の大事の用ふたり人ふし。
孟子のいふく。君臣を視る事土芥の如くふまば。臣も君を
見る事寇讎の如くとのふ是也。又いふく君仁ふまば仁
あらざる事ふし。君義ふまば義あらざる事ふしとある。
聖語を以てもよく考るべし。是ハ君の心得をナス迄ふ志て臣
たる者ハ君の仁不仁ふかまよりもとも忠義一途ふ心を用を勤む
べし。是ハ君ハ君たらずして臣たるべしとの聖語ふり。
又主人ハ家来の非分をつくせんさくをべらずして。ひまなくせん
さくをしてハかへりて不和とある事ふり。心得て使ふべし。
又家来ハ主人の非を少しもうらず。忠義金鉄の形ひをすべし

○忠孝の二ツの道ハ孝ふ人のうへとすべふつとふよ
○忠孝の守りを常ふ放さずバ。いふ惡魔も寄ぬ也
此歌ハ家来のもより本尊福德安穩の根本ふり。惡魔を
拂ふの御祈禱ふり。是等の奇をよく心得て。不忠不孝ハ
少しもふさまうふをべし。
扨主人とのふ者ハ外目より見る時ハ。樂ふやうふ見ゆ
玄。ふの大儀ふる役ふて。中く孫ふ子ふも心の休まる事
ふし。我身一ツでさへ世話の多き者ふるふ。まして大勢の
家ふ人のからざを領ふり。夏ふまを。甚苦勞筆紙ふ
尽しがたし。よを組で考へ見る也。家来の病氣ハ則ち

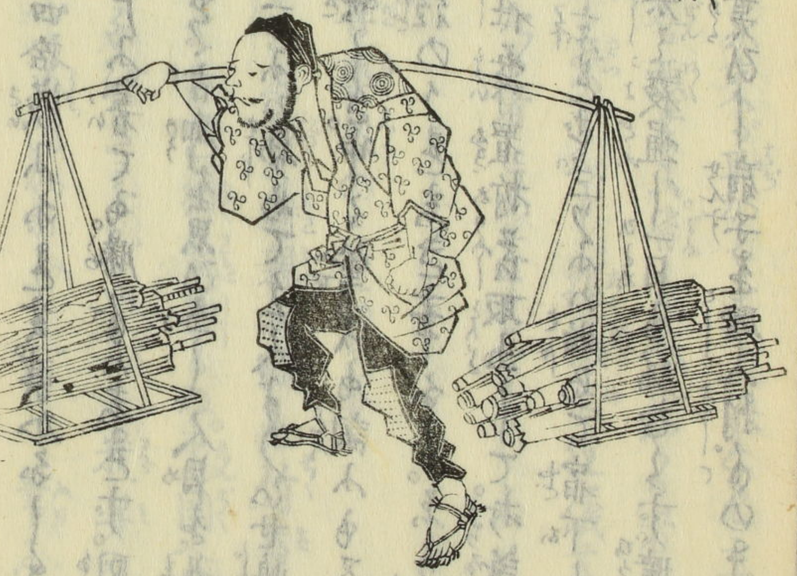
主人の病氣とある。家來ゞ恥かく事ゝなるを主人の孔
とある。家來の事ハ善惡共ゝ主人へかゝる者なゆゑ。
配ふり。をゝて万事一案すべし。現儀ゝ現儀共ゝ主人
の苦勞とある。家來たる者ゝの事をよく考へて。忠
義を尽すべし

奉公ゝ出るゝ喜樂恋の三ツゝある事

○一ツゝハ始て江戸へ來公ゝ出る時親ゝ離を行馬の友ゝ
別を仕馴ゝる古郷をもふを孤先知らぬ国へ旅立の
事ゝ子供ゝ伝ふも。親のゝげきをかゝしを我身の孤生を
案事彼是の公をひ心の内のかゝしさ。中ゝ筆ゝハ尽し

がゝし。予ハ仕著者ゝを四拾歳ゝふを共。其かゝしさ今ゝ
ゝをもを。夫より江戸ゝ著ても。勝ゝハ去を。則涙ハか
し。入相の鐘の音ゝいとゞ古郷を思ひ出し。人目を忍び涙を
去る事。數ゝ〻。二ツゝハ初めて主人より仕せ嶋の仕著
帯子を貰ひし時の嬉しさ。中ゝ筆ゝも詞ゝも尽しがゝ
し。予生を以来是程のうれしき事ゝし。ゝり紙掛を
ゝて紙ゝ色を大切ゝ仕舞置拵を取出して。打詠めて樂
むゝ持其嬉しさ。今ゝ考へをゝ三ツゝハ始めて宿下りのいと
まを。時者夜より樂ゝ夜通し一日も休むゝ。曉の泥ゝ
起出て。仕著を著て貰ひ扇子を腰ゝ刺ゝのまい豆の

紙問屋の売り出しの短冊
紙や、いろ〳〵中ごしらへ
うりあるき、茶種屋
のぶら〳〵手ハ焚蒼木よ、
虎やの立種香とハ
て、うりふるく、売ち屋
の売〳〵しりハ紙
くもどろい古着や
のぶら〳〵者ハかゝ
かさの古ぞ孫、古梶
うりとなる



ふを所を覺へざ。上野山下浅草両國抔。又せ男。豆藏を。見物する所を持ハ。中く壯年の比花見抔山吉原の夜の氣色抔も。此宿下りの。百分一ふも面白きとハ思ふまじ。生まれてより以来此樂を從の事ハ覺へざれ。右樂慾の三ツハ。唯産を傾ふまて。格別甚意味事なし。此生まれの侭のふて有たさ樂ふまを。其丈ハ世も生来ね事也。智とりふ樂ふ是非分別のふふ起り。私の勝手を思ひ。心ふ曲がんでくる也。たとへば仕着を貰ひても。二三年もたてば。是ハ稿柄ふ安ふ。古いの。地合ふ一向ふ樂ふのと。りふ機ふ出る。甚時分体ふ。是ハ主人より下さまと樂をと。思ひ直すふ則ち己をふかり所也。

又宿入花見吉原へふと。移変ふる時ハ。主や私ふ出るふ。終ふハ本心を抜まかす事ふり。本心を打まうすと。りふハ。己をふ理を分る事也。一年ふ二度ふ三度の事ふ。まを。少しハ延くふ。りても。宜しかるん甚かをりふ。平生ハ特生をべしと。己をふ理を分て本心を失ふ事ふり。至て宜しかるず。隨分と早くかへりて主人ふ安堵さす。是一是大福徳を得人也。若イ者芸篤と。ふ得ふるべし。私の身勝ふふき女ふをべし。拙女所へ移事一へん二へんも大ひふ。ふろ。一年ふ一編二編移を誠の堅人とハいひ。ふ。へハ。ふ。ふき人の内也。どうらくの内也。大ひふ

福徳を知らぬ人也。一生ゐへんも知ざるべし。さきをきべ
誠の堅人ゐ去て。福徳の十分ゐ来る人也。是ゐよりて
一生ゐへんも知ざるべし。若行人ゐるべ。大事のくの
我身を捨るとゐふ者也。是國より江戸へ出世ゐさゐぶ
ら。身を放埒ゐ持て不首尾ゐ相添ゆさずん。
主人大事我身の大事ゐを去て。家業ゐ精ゐどうら
くせば。無智の悪人也。第一主人の名をけがし。己れ
貪欲ゐんぎゐ食とゐる人也。いひもうのゐい大馬鹿也
早く左所へ附登せ土百姓ゐすべし。左様ゐ不覚者ゐ大事
体大金の支配へさせがたし。元の貪欲百姓ゐさ也。若

江戸ゐ長居せば。ところ病ひを引受親兄弟ゐ難儀を
かけ。人交りも出来がたし。早速在所へ引こすべし。早く
若かゆの人とゐふべ世界の人ゐ面目ゐなるべ。一切の
若イ者共。此事をよく去て。深く考へて。一生ゐ一度も
行べ。若一度も知ざる人ゐ。福徳ハ十分ゐ来
る也。威勢も安心ゐ。ゐ川て是ぞ誠ゐ家の寶國の寶
とゐふべし。此ゐの善悪勝劣ハ人く考ハ也。実ゐ一
いひ尽しがたし。
○扨人のいひぞやつけし。斧のゐと。松ハを是ゐ雪ゐとゐる
○ちりくりと蟻の穴より水ゐりて。悪事千里の堤くずる

歩くるき事を云てもの。大ひなる笑ひの事ハ。此二者の歌ハてよくさとるべし

奉公人ハ三ッの不思議ある事

○越後屋白木屋伊豆藏の類。店番頭迄勤めぬけまゝ。八百両。宛の元金定り也。支配町傳馬町向の大店ハ大方三百両くらいも。夫より以下の大店質屋両替屋の類ハ百両五十両三十両二十両。其家々の格式也。是を元金にて同ト奉公ふて大なる高下のいる事うハ元ものゝ元金。是ぞ天道直成所也。右八百両の元金を貰ひし者。其ハ成程初めの内ハ。花く敷店拵生計をなし。大家の風儀ぞ自然とうさくるぞ。万事大いくまゝハ云て。

其上人金を貰ひし事ふまゝが。最早大預成就とらくふ。ハ
ふ洲て万事油断ぞ生来て次第くハ身上まよりいつくる
店なも仕舞ちいさく格子他り拵ふ。元本店へ元銀奉公
と号て再ひ元人の役ゆとふる者多く。又拵支武十支の細
元ものの者ハ。中く油断ぞてハいけぬ。一切不乱とかせぎふ。
精をいま。次しも奢るなふ。其次第くハ。身上よくふつ
て。子孫も繁昌し生店ハ生店を増ハ皆此拵支武十支の細元
ものの者の様也。其訳ハ武拵支ハ取角と身上ハ。万両の分
限ハふる変ハ成安き道理也。八百両の元ものハふて八
三千両の身上ハふりぐくき者也。其訳ハいくまゝ八百両の元

持ち合ふ。万事千八百両の風が吹八百両の氣がひる有ふ。随分とよく
ゆいと所が一年ふ弐十五ら三十五ら位いのびるつ〳〵一ぇいふ
らでハ移ぬ者也。又弐拾五ら位いの細ぇもの者ハ百両ふふ刈
ても。やはり弐拾五の心持がなふ也。我理甚外も弐拾五の
格ふて暮す有。段〳〵と金根ぶのびる也。又千両ふふ刈ても
百両位いの格ふて暮す有ふ。忽ち金ぶ金を産で五千両一万
両の身上ふふる事ハふふり安〳〵。世間を見て考る者ハ店
より。別まする店ふ段〳〵と大きくふるハ希也。大方ハ段〳〵と
すがまる者多し。股引ろうんぢふてかせぎ出したく身
上ハ次第ふ榮る者也。二ツふハ越後屋根ふ向ふ店とゝふ

年季奉公人計四百人餘りひろう丈ぶ次第ふ役ぬけ〳〵
て。番頭ふふる番頭を三年勤めて退役する事也。此勤定で
ハ今糸りの者ハ千四百四拾年目でふくてハ番頭ふ成ぬ
ける事ハ出来ぬ也。ふまた芸右の内から年〳〵ぐら〳〵打。病
身病死ふて三四十人宛。そ刈ぶ出来て。其跡へ年〳〵順ぐ
りふふる有ふ。三十七八歳ふて番頭ふぬける者多し。是ハ
運の強ひと弱ひとふふる事也。右四百余人皆番頭まで
ぬける者ふて勤めるけれ共。後ふハ〳〵ら〳〵を打。病身ふ成
ふ刈て。運のよき人ハふり。此運のよきひつよいハ。亦世の
因縁也。又ハ不養生ふ成て煩ひ。病死する者も多し。是等ハ

求めて不仕合とふる人也。唯主人大事とつゝしみかせぐ人ハ祈らずとても。佛神の御守りハ有て。運つよかるべし。大方ハ不幸ゝゝ多て。身持悪く定命迄生延る人ハ希也。大方ハ半壽にて死する者多し。たとへゞ三十俵武人扶持にて正月より大晦日迄暮し方の虫喜る中うに。宛行ひ置ゝ也。是則ち定命と同じ事也。甚積りを以てくらしふゞ寒かゝるゞ空腹ゝゝ不。年中暮すけまを。不相應のおごりをして。酒をのゝ。女郎を買ハせゞ。盆前の内ハ一年中の宛行ひを楽ひふく者て盆後より。大晦日迄の暮しハ。何を以てせん。飢死するゝ有るべゝゝゞ。是不養生にて死する不同じ。残念ある事也。何ぞ物惜づくゝ拵とする者ハ。甚ゞ簡素ひ生涯りにて。小人嗤の巾着ゝどの智恵也。取ハたゝゝず。何事も約束づくゝにら誰ゝ人魅生して持ぐ者ハ有るべゝゝゞ。約束づくゝにゝゝかず。ゝゝかぎげかりたる金ハ。天かゝでも降そゝ者也。然るハ三年待てもゝ文もふらぬかぎげゝりとりハ変ハしかせげゞ富。ふまけをバ貪ハ有る事眼前也。ゝゝゞ主ハ忠を尽し。親ハ孝を尽し。礼義正鋪身を慎を家業を生殖せゞ。天ゝ福徳を與へゝハ事。疑ひふし。皆く忠義孝行を致し家業を生殖して誰惜まぬ天の福徳を得

ゑゝ爲し。養角忠義孝行のやさへなきを。一生不自由ハゐ
き者也。又一旦信を失ひて。ゑ忠不義ゐる時ハ。いろ〳〵信
を用ひても息引取と唱ひて人參を用ゆるふひとゝ迚も
取ろへ〳〵ハ生素ぬ者也。此時ゐ至りて後悔すを芸。詮ゐ〳〵此
用ゆゐりて信力を生ゑて。大切ゐを之を致さべ〳〵。又落ぶ
きても。信ゐるを人のゐるを人のゐるを人のゐるを深き有ゐ。同〳〵貪欲去
ゐがらも。大きゐ淡ぎ姿き場ゐり。是を後悔の信といふ以前
のゐ奉ゑを粥くと思ひ去りて忠義孝行のゐを起す者
也。世間ゐ後悔の信多〳〵三ッゐハ四百人の中ゐて首尾能来ゑ
を動め上て唐持家持とゐる人ハ。衛く四五人也。其外の三百九十

五人ハいづをへ行〳〵や知をがとし。皆思ひくゝの穴へこらい
て世をくらくらとゑへとり。又の死去の人も多かるべ〳〵。ゑの
流をと人の行衛ハ探〳〵ゐ者也。老人昔し知る人の紛
湯去を此ぬを考へ易る爲し
○織問屋のゑく者りハ。短冊紙や色紙中とゐゐて賣ゐるき
藥種屋のごとく打ハ。焚薬ゑ虎屋の五種香とゐゐてゐり
ゐるを。贄屋のゑく者りハ。ゐ定りの紙くぢかい右着屋の
ぐゝ者ハ。かゝるをの古骨右探買と呼ゐるき。支晉やの欠落ハ
車力仲間へをひり。湯屋の番頭ハ寄合辻番と起かけ。ゐ皆
是直い職くの徳ゐよるもゐかし。各〳〵ゐゐ川てゐけゐるき。

南こ一日ハ九拾文ノ百位の利分を得て諸事万事の賄ひを為て世を渡る者多し。惜いかな。主人ハ居て其働きを致しゐを余程目出度身上となるべきハ。残念千万ハ当時後悔の為なし。急りふくかせぐ時ハ。稀ハ身上ハ有ル者もあり。又主人へ帰参する者もあり。又再び主取為て目出度身となる者あり。おそく共忠義正直を第一と為て。一生を遂るべし。又始めよりあやまちハ人ハ。弥く忠義を尽し主人大事を忘る事ハかなき。さすがを福徳ハ澤山ハ来て終に繁昌とべし。又忠義正直なる時ハ一切の邪魔外道寄身事ハし。かりハも油断ハ扱ハ買物ハ来る人ハ。万事氣を付寧ハ取やゝ高き下男下女抔ハ。主人の買物ハ。愛相のよき所へ行者也。一日ハ一文宛よけいの徳用なれ。一年ハ三百六拾文是を以て主人の損徳を考ハ。ゑ。ゑ。たとへ鼻紙たゞこゝ。ゑど主人よりハんだんハ渡しなる物ハ。冥利の考へハ。ハ者ハ。おのゝ。ハから廉抹ハする者也。又忠義我冥利を知ハたる人ハ是も品ハ出来ぬと大切ハする。ハ。ハ。しめ廉未ハする事ハし。ちり紙一日ハ一枚宛かんりゆくすまゝ。一年ハ十八帖ハう。見ハて万事考へべし。忠義のハ

おもうけいこうえちく
のぶうちのこそ
とくぜんひく
おうこずのおま
えとのこ、とび
ひぢりのかゝつ
えひたがるのの社よ
りひいるきゝ者
おんもたるおたゞ
こゝろづくいるり
でりちどもの
ひをちゐく
さけまいるを
やいく
たべる

時々色〻採〻ゐ横合事を思ひて。うつかりと云て居る
有ゐかい物ゐ事〻下男採を。元撰ドて。云食と思ひ。通
ら洗せ採とナス採ゐる廉相の変もひりゝ又ひる時ハ孫
坊主採を。かい物かいと取遣へ採云ておろしき事もひり。
是忠心義心ふき有の事也。忠ゝ我正直さへひるまハ勘定遣
ひ其外の不調法も成ふき者也。大体年季奉公人とナス
者ハ。上下ゐらして一人前一日ゐ三りんめ宛りのけ孫を。入
用たらぬ者也。十人の奉公人ゐ一日ゐ弐りんめゐらしりゐ
計て。漸〻ゑ直段ゐゐらでもかね者有。余程たんとゐゐ
付孫をゐらぬ者也。其ゐけハ高ひえるゐ門分其外ゐ時

のかゝり物ゐ洗ひて。中〻主人の徳用ハふき者也。若此義用
ゐ公のつきたる人ハ。主人の物とて。少しも廉末ゐゐらぬ
道理也。一切の事公人共此事をよく考ひて。御主人の
物を大切ゐ致し。かげひゐゐふく損失ふきやうゐ
致し。是主人の為ばかりゐあらず。我身も天の冥利ゐ
叶ひて。福徳ハ預るべし。又よく考へて見るべし。
日〻のくい物着物の入用ハ。何所から出ます。皆主人のゐ
ところより出る也。余ゐどりゐ付けて差上孫を。主人の大損
也。日〻の働きハ我身の養ひ也。主人の為ゐハ少しもゐらぬ
ど云て。皆我身の為のつとめ也。ゐるゐ唯日〻主人ゐ働て

やるやうに思ひ。主人のつとめをおろそかにする人なり。是何とりふ子簡ろ知をがさし。日〻のくい物著物小さひの入用は。何所から出ます。天から降もせず地から湧もせず。皆主人のふところより出る也。ゑるを考ずしてくい物著物小さひは天うでもゐるやうに思ひ。唯出来るやうに思ひ勤働く事は唯主人にたゝらいてやるやうに思ひ奉公人なり。不届千万とりふべし。かやうに道理をわきまへぬ者は。何様の悪事をせんもたゝりがたし。早くいとまを出すにしかず。かやうにいふを間遠ひと思ふ人は。我身上を持て飯米小さひ著物等のいるやうにおもてゐるべし。中〻出来る物にあらず。どのやうに工夫をしても出来ぐさし。ゑるに人のおかげにより。飯米小さひ著物共思ふにまかせらるゝとりふは。ありがたき事也。主人の眼より見る時は。いのゐふをたゝきでハぐふをえても。飯米小さひ著物の代ハふし。年中ハ余程の足也。是でハ盆暮の勘定ぐるしぬと苦労者てござる。ゑるを知らずとおてを人にあるか働てゆり徳用を有ると思ひ。太平の八の字で虎飯をたべる様ハ。ゐまり子簡ふしとりふべし。是ハ考るに及ばず。毎日くゝ目ふをて知をたる事也。甚考へもふしふまけて居て。大飯をたべる様ハ不届千万山上ハゐるべゝ子。奉公人たる

者必道理をよく心得て。忠義一途ゐ昼夜つとめ働くべし。
左すまを大飯をたべる芸ゐまり罰ハ行ふる。ゑ子ゞ大飯
をくゐいといハよゐど勤めちゝ〳〵か孫がゐ〳〵と云べし
○いづまの家ゐもゝ代子供をゆけまを芸。主人の御用をうく
勤めて主人の力ゐふり。助けとある人ハ至例て希ゐり。皆
ゐまゆ者。ゐんもく者ゐ去て。主人も甚ごこまり入ゐハ
也。糀町小西六兵衛の奉々人ゐ善助とらゐ小二郎ゐり。其
親がらゐハ汝ゐ安ゐ。ゐんをく旋上り者を。御主人ハ能
面倒を御ゐ。ふさまるゐまハ汝ゐこまりて。持兼てゐ
とらゐさゐ事ゐ千万也。誠ゐゐんをく者ゐ相違ゐし。

らを主人の所ハゐんもく者の寄合。不時者の寄合。舞上
特事を知らぬ者の寄合。損徳善悪を知らぬ者の寄合。
ゐまゆ者能天氣者の寄合。利ゝ風義理知らぬの寄合。
旋上り者。金をひたがる者の寄合。無智悪人の寄合ゐを
む。主人も甚ご氣のもゐる事也。少し油斷をすゝを。大
損をゝと直ゐかゝ敗布。かゝゐ癖とある。誠ゐ恐ろゝ悪ハ。
我子我ら代去ゐり。若イ者六歌仙ゐ
○旋上る。不めぞやさゐく利ゝ風ゐまゐ事ゐハついだまさゐく
○拵びたゝ。のゝかゝきたゝ。楽ゝたゝ。みゝ俗りたゝ。金をひたし
○よき事ハどゐゐて邪ゝで面倒で小六ゐまゐて。安ぐゐ〳〵ゐい

此三者の歌をよりかへしすんで若イ者共の身の上を考へ
見るに少共よく幸ハせぬ故少共取所ある。主人の氣のも
めるも隠む千万あらそひや。堅かゝら見てる。横うゝこんてる。梟
上を持そふな所ゝ少共ふい未ふハ主親ふふんぎをうけ
ともをかぶりて。而ふぬをつの者共をゝり也。公ひる若イ
者ハかゝりふ道理をよく心得ゝ。帝主人の帝カふふ
る者ゝふ忠義一途ふ昼夜つとふ働くべし。若イ者六奇仙
をよく考へ見る。此外ふまゝと三者ひをを共ひまり若イ者
共の。臭ぶひ。げゝ幸をうるをハ若イ者びいきふて。家
へ出さ故也。此天見を聞て。身を修め家業を出精去て。帝

三人の御安堵ふうゝかゝふすべし。若此天見を聞ずして。
不忠ふ身持ふゝを。是非ふ及ぶ殘りの三者を取出去
て若イ者共の新の皮をむき。大色とゝを致さとべ。何卒
上の三者も。跡の三者もよくそとふいふるゝふすべしさす
共むを主人も大安心。其身ハ大福德を得る幸疑ひふ。何
卒御主人ゝ何所へ出して。少しも業幸ハふいと。安心
て。居ゝ者ふゝふ人とふる。是を誠のよい人とゝふ諸
願成就の人ふり

○評ふいゝく。此八百両共ふハ此ゝ。此拾両三拾両ゝよいと
ゝふふハゝゝ。八百両と此拾両と八大違ひふを共。八百両

業よて世と人ハ大店の氣風ぶぬけど。万度身ふりおごて
有ふ滅亡ふ及ぶ也。是も五百両位のつりとへて。始め分甚
用ふて暮すよ然てハ。武拾両位ハ中く豆元へもより身かし
ー。ふと芸家ぶ世の中の形勢也。武拾両の人ハ。ふ未やと氣ふふ
ふんぎを立ずふ居る。八百両の人ハ。ふ未やと氣ふふ
つく。おごるとまく。ずふ奢る也。八百両のふとろへるも。武拾両の
繁昌するも。ほーの仏得遠ひ也。唯奢るとおごくぎるとふひり
八百両業よて世と人ハ。全ハ何國ふも澤山ふひるもりふおりひ。
ひのまり天切ふ世ぬ者也。又大家の風ぶぞふもぬけずぞんど
おもく成ふ高ふまる有ふ。末ハふとろへる答也。是も今迄の

風儀を捨て。身も仏も引下り外聞もかまはずふ。万事ふ怪
ふ暮ー。ふと。かもうのひやまりハ有間鋪ふ残念千万ふり。彩
角名聞ぶひ引て。大風ふ出りたがるふよろて也。武十両三十両
のえふの者と同ドやうふ思ひふを。何ぞ見世を仕舞再び
主人の店世話ふ成ーんや。無智ふ有て赤の事ぶ見へぬ人
也。能く考へて越度ふきやうふすべー。後分質ふふ君子の
道也。大風を止めて。内道を行ひ世へ歩さく格子作りふ有
て本店へ見繕奉公する氣者ひふー。大店向の番頭元ふの
道理をよく考へ於て。店持ふふ引る時の。突かい棒ふすべ
ー大きふ店世話

○余は世の中の事ハよくまゝ也。八百両ハ繁昌〳〵く。武士ハおとろへると定まる。居てハちいさい所や食を求る所ハ奉公する者ハ一人もいるまじきハ。左ハいるまじきハ。左ハいるまじきハ。よきがいるまじきハ。よきがよきハ。唯其人の一心の覺悟ハ真也。世の中ハまことり持とハよくいハ者也。上下共におごりをやめよ。唯一心ハかせぐべし。おごりを止て一心ハかせぐ者ハ御家ハ繁昌子孫の長久なるべし。扨又奉公人たる者ハ忠義正直を第一とすべし。主人の損のもかぬやう又諸事万事氣を付て大切にすべし。天の冥加を叶ひて。彼未急度吉事あるべし。ふる人の損徳をかまはず。己が

身の安樂を好まず。己れ勝ほどを考て。主人の大恩を忘れずに主人ハ働て居る内ハ思ひ人に勝れ者ハ天かゝるも降ると云ハ思ひ主人の大恩を忘れぬ者ハ其罰が當て一軒の主ともなるべし。所くをさまよひいるき後ハ主食小屋へもいこと。遠州ハ風の神を送りとゝ。ハ始末也。ハ主至極とハ云べし。いろ〳〵子とハ云まじ。

○又主人へ向ひてうそ偽りをいハ。変者油斷すべし。身ハいやまりいるゝ。ハ必ハ思ひどかまりいるとゝ。又用事ハ主ハ主ハる時ハ。あまりおそく帰るべしハ。ハ悪事いるとゝ。かゝるべしハ。ハ必ハ思だんせど用ハ

去て使ふ也。しだんをすると。大ひに不覺を取事いなり。
心得ある也。たとひ少く拙くても。正直ある人を。よく教て
使ふべし。十分によき人にふさとまるべし
○ふぐくても。芸にふくても。かくさでも。唯正直なよき人と云也。
何ほど利根でも。發明でも。悪心のある不忠者は。変て使ふ
也。ちぐ。いりぞに笑ひを引出すものなり。拙くても芸
にふくても。唯正直ある人を用ゐべし。此人を用ひなれば
大なるあやまりはなきと云也。老角人は律儀眞實
のある人でなくては役に立ぬと云べし且又家よりの雜
談なり。勉事を麻末に云て。ぬやまるはあたらまへなり又

なるこのり丁寧也て遠くて。用に立ぬ人なり。是を丁寧美德
を損ずるとなる。又ひまり用ゐなるやまる事もなり。又一つ
肝で押てくる所もなり。色く様々の事なりて理の當然
に中く知をがたし。日く月く工夫なりて。中道の可なる所を
通る也。前後左右を考へて我身の德を增世の中を監
梅よく遠るべし是人間第一の心得也
○ある人のいふ。村田一統其外大店向にも。毎月一度寄合
を云て。御先祖の掟をよくきかせ。御先祖の通りを相守る
也。き様に渡す。是によりて髮の結ひ方。羽織の著
方。衣服の調へ方。夫風ふき方。葉をふくぬ方ふする也。

若奢風を好む者ひとを。其ゑ所先祖の風儀ふひるぬ
有ふ。此店ふハ法断りヤス。ひづまをへふり芸法越ひとと。店
中相談の上其人を追のけ。又外の人を支配人とまると聞
く。是よき掟也。奢風ハ至りてろし。婆の造ひう刹下げ
ひりこ。ひつびんふハ衣服抔の奢風稿ぐ等ひまり自ふ立
ぬやう。業をふるらぬやうふすべし。一所ふ
○さやるとて。そでふ姿を好むふよ。いつもすらぬ風をえふ人
と此歌の通りふ身を持べし。武士ハ武士の風ぐよし。百姓町人ハ
百姓町人の風ぐよろしきふり。是角其分ふ應ぢて。其家の
掟を守るぐ專要也。其家の風儀を守るべ。ひまり悪敬変

ハふ三物也。是角身分相應の事ぐよさ也。武士ハ武士の二
字。町人百姓ハ町人百姓の二字。玉家函者儒者ふハ二字を
ゑ是ぬやうふまべし。ふるふ已まろ職分の二字を忘まく。
武士ぐ町人の真似を致し商ひをまろ。町人ぐ武士の
真似をゑて。馬ふのり。弓を挽馳打抔するハ滅亡の基ひ也。
又ハ他り苗氏新田事至りてろし。是角其家くの風
儀を失ふこぬやうふすべし。我身を大事と思ひ。行末
安穏ふ暮さんと思ふ人ハ。先祖の風儀を守り我侭を
もる事ふる。夜更し朝寝。酒色好こすす
る事勿。唯家業を堅持ゑて倹約を守り少しも油断ふく

るゐもふきび。
江列（ごりつ）物列の。
ゐんくまり。
上三三ゐるこ
ともがゐんぜい。
江戸へゆかうゐ
ゐるおとふご三人
ついくいてごども
のゐくらんどを。
五十そくも百そく
もゐんていくむき
くさもくつまてゐる所

主ハ忠義親ハ孝行を致さゞれ老人いえを年上目上の人を
急度敬ふべし。又高位高官の席人ハ変ぜて席無礼
ふきやうハすべし。天下の掟家の仕法ハ成しも宵く
ゆるゝゞ若能く時ハ大ひなる笑ひを逢べし。又忠義我
孝行を事ハ去て。高位高官老人を敬ひ一切の掟をよく
するハ於てハ我身の安を福徳ハ上ハ有べゝゝず。右之條〻
急度相守るべき事肝要ふり
○正直ハ家業大事ハ。御法度を守る心ぶすぐゝハ極楽
○御法度を去りてつゝる我悪事。其形未を地ごくとハいふ
世ハ有まゝ有べゝゝず。若意也ふを。一身の置ところふし

○江戸勢列三列等の國〻より。十二三ハある子供を奉公ニ
出さと。春ハふもふをだる供ぶ三十人五十人不ども。一所ハ江戸
へ下ってゝる。四十五十位の男ぶ二三人も付て居て世話を去
て連てゝる子供のゝゝんじを。五十足も百足も持て居て
きまるとだきかへさせく。世話を去て連てゝる。春ハふる
と義組もく。江戸ハ来る事を知へもをふ去てよとすかゝ
去て。親達ハ大業事也。江戸ハ火事のよくゝる所ぶやけ
ふ。怪我ひやまちでも世孫だよいぶと。風の吹ハつけ。日ぶ照
ハつけても。業事煩ハ事をかり也。鳶すの鳴ぬ日ハひま
去。我ふの事を思ひ出さぬ。日とてハ一日もふいぶゝで息災

で首尾能く世を去て居るとよいがと。何所の佛神へ祈願
を掛ても。我身の幸い願ふ事ずを去て。唯我ゐの息災延命を
世するゆうゐと。計り願ふ也ぞめぞ達者でつとむるかう
ゐと。是のミ祈幸ゐ〻して居るゆう。何所其所のむすこハ
江戸へ行と直ゐ死んぞ。何所のむすこハ越後か白木か大丸
の番頭と近ゐ河たゑ芸辛抱ゐ見るゝくて。全限を尽ひこと。
去く去河て。今ハ何所ゐ居るゝ去きぬげゐと評判し。又
たまゝ〻辛抱をよく仕遂て。親の賣〻田地を買戻し。在所
の家も造り直し。親達を安ゐ養ひて近所近邊の不
幸のむきをこもゐるとよい事を聞ゐつけゐるゐ事を聞ゐ

つけ。祈幸煩ゐ変ゐかり也。ゐるゐむすこ辛抱をこく
去て勤〻ゐゐ番頭とゐり一年もゐると中登りゐりサ
其年ゐ来ていつの数日ゐハ糸ゐりまきといゐ。ゐ紙ゐ書く
ゐゐ。父母ゐ亡立統しさ近所隣へふまきまこす。誰聞ゐとも
いとぬゐ。私等ゐむすこも。首尾好く世去て。何月幾日ゐハ。
糸ゐりまきとふま廻して居りくサゐ其時ゐ来く。明日ハ
彌〻来ゐとゐかゐ去て兼く一家親類の衆ゐ迎ひゐ行。
母の思ふ通ゐ。初歩時ゐ。何くゐすきでゐ河〻ゐ。其好ゐ
物ゐ調へ〻ふるまゐ〻い強飯ゐまき牡丹餅も好でゐつこ
ゐゐ。是を調へてゐるまゐ〻ませう。者ハ何〻とむすこのよう

こぶ茶を考へ居る。是ハ母の大義悲でござります。扨小豆飯も好でハ御ざかり。先今日ハ是を調らへく進ぜまをうと。小豆飯を焚て居る所へ入ぶ来て。只今むすこ屋どのゞえへますモウ半道をかりとの。法袋ハ是を用く。法飯の熟さも。ふへぬふもかまゝどと。火焚場より直ようげ出して。むすこの来る道筋へ迎ひよもくまゞどえへぬかゝ者て。段くと彼内ふ十丁計りも出るまゝそのすこと向ふ。かゝ笠をかむりてえへる。ふど近くふ御して能く見まゝ大きくふつゝまゝ来。雅ふ顔ゞひる者ふ。是ハむすこと者。すこも法袋とえく。笠をぬぎ腰をかゞめて母様法さげん

よく法出ふさまて。お目出度存じますとの。母もふの幸抱者て来く下さまて。大きくふ御ことのゝ計りて跡ハ続し泪ふ伏者ハ御むふひふ勢ハいゝまゝず者てうまゝしさのひまりふ考達者ハ泪也。此時母のうまゝしさゝどの者うふあるふと思し石す。一生の内ふ跡ふもえふ所のうまゝしさ也。又父ハ家の母びまを直し座鋪のうすゞりまえ障子の切ゞり近者て。我子の来く時ふハ。ひまりえ若安所を見せまいと。家内屋鋪近きまいふ掃除を者て待所ふ約束の通りふ息ゞ来くと者ふ。其悦びいくん方ふし天へも登ろうまゝしさ也。世の中ふ久しぶりふて。我子の対面ふど

うまれき事か。又とひる度かゝ子ず。嬉しゝ泪ゐむせぶも道理
千万也。人〻親子のむまれこそ子供けて。其ひ泪も人情ゐり
○遠方へ出ゝ子供ハ。逢たいえこいと。男〻答ゐまま芸。現ゐ
江戸の者ハ娘を商屋雇方へ御奉公ゐ上て置。毎日でも仮りゐる
者ゐまを。宿下りハゐく芸よさそゐ者也。ゐるゐ何年目
ゐハ宿下りをすると。指を折て待て居る。況や遠方ゐ者
十年も或十年も。顔見る事もゐらぬ親達ハ案事て。答逢
とゐる筈也。是ハ乞千万と思ふ度〻。又江戸ゐハ何所の御
店ゐ勤めて居る芸。毎日も逢ゐ世ける又使ひゐ出さゐゐハ。
ゐりもする。我家ゐ居るも同前ゐまを芸。正月十六日ゐハ素の七月

十六日ゐハ素るとうまい物を調へて待て居るおやゐハ是
等ハ待ゐも及ばぬ事也。度〻素て世話をかけるかゝ二年や
三年ハ素る事ゐらまとひそゐゐ者也。ゐるゐ右様の事
まゐゐ利ハ一人もゐ〻。江戸廣〻といへ芸。終ゐて変ゐし。
角〻事ゐ〻。是ハ親の慈悲ゐ者て逢てもくも逢ぬ者
也。況や百里二百里三百里も。隔ちたる親達の事ゐまを逢
たがるも乞千万也。又或若年目三若年目ゐ逢事ゐまを。
是程の嬉しゝ事ハ。跡ゐ〻ゐ〻ゐ。涙ゐむせ
んで為のいまを。道理至極と思ふ〻。
○ゐるゐ形角遠方の所。海山へゝ。世ゐ素ゐがゝ。家業

も身ハ去ることなし。不埒放蕩ハ去らく。主人の物を盗み酒をのみ。
母ハ妻を買ひ求するハ。我身知らぬの大馬鹿者也。御主人ハ大
損をかけ己れハ貧乏の地獄へ落るく。一生難儀大恥也。傾奇
の者ハ人ハ顔ハ合せぬ。世間ハせまくふ川て。世の道ハ川
ふ川。又主所の親達ハ業平類ハて。夜の目もひらぬ。ふき
悲をなしらん。不孝不忠の大罪逃る所なし。罪をかり
でも。生く世く貪乏難儀の種蒔也。恐るべし慎む所し。何卒
辛抱を致し家業を専に致し。主人親大事を忘るべ。
主人恥さへ大事とする。ひ〳〵も。あまりうろき者ハふき者
也。何卒主所の恥達ハ安ひさ世。追〳〵世の略しの用へる事

ハすべ。さて世ハ其身も安穏迫く立身出世ハ事疑ひなし
○又一切の奉公人ハ親ハ一孝孫度事ひり。大切ハ親ハ孝を
生き古郷をふり捨く主方の江戸ハ来る事。何の為ぞや
業りたし。不埒どうらくかさかき鳥を落しハ来るこの。又
立身出世ハ来るこのゝ。おかと兼りたし。是ハよく志る事
ハ直ハ直ハいひはけすべ。いひハけハ出来がたるべ。知を
たる事ハ出ぬ。くどくハいはぬ。不埒どうらく。鳥たまの事を
人出。江戸へ何ハ来ハ来ることりの事を深く考へく。是より心
を取直し。不埒どうらくをやめく。急度辛抱を致し。家
業を出精して。主家の御為ハ為るべ。左をまで我身の

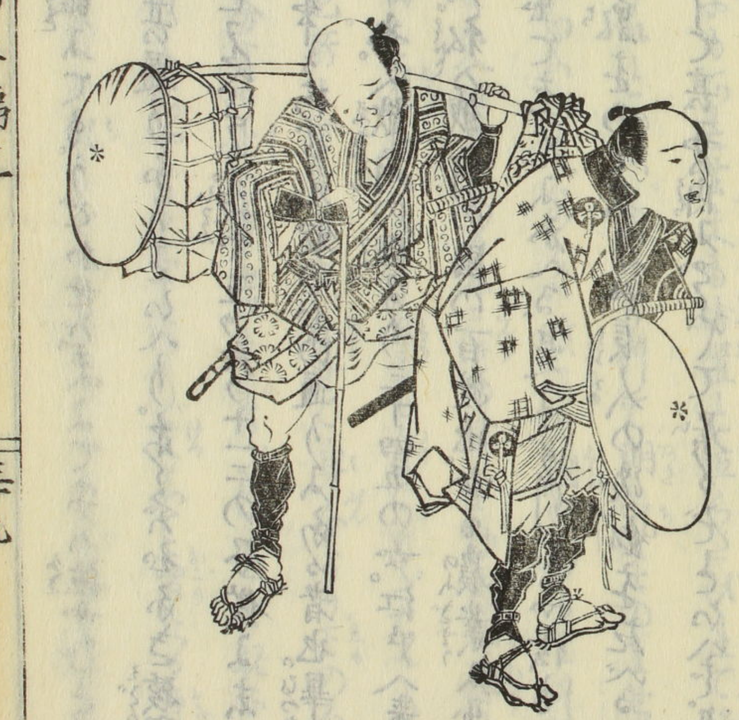
世也。其内よりは是を主従親子目出度人とかく。何事
よき人とかりて一家親類何事の寄合にも。上座をえて。
いかに高の遍る人とかるべし。此一段をよく讀て深く考へべし
いろは短奇に。為るる事いかに者いやで。毒をはてが
う人ずきとかり。是に相違ふひ。中年以下の者共。祝
の公事ひも我身の難儀とかる事も知らず。何の弁もふく
人の恥所へ出も恥び不持放蕩此上ふし。祝共のいか
成に今時の風にかりなど。慶長時代の分別ふり拔とかく
をかる丈達をよい人と思ふて。父母の仰を少しもきかぬ。どう
こく仲間ばかりふに。父母のいかの事をいかいさけすを六ケ

敷いたびくらかふてもきかざを後に八祝も退屈ていこ
ぬ世ふかる又祝父母袋に頭さく位牌にかるかまらずに
おけ。位牌にさへふを此方の仕せとかに人拔を眞實の
友と思ひ膳むを嬉おうもふし。其膳むをふき所ふり大ひ
ふる笑ひを引出し一生をかやまる事也。此者に若年の人に
に膳む事をかうせたき者也。膳むをかる者に。あまり大悪に
ふさぬ者也。又子供の氣隨我侭ふる親が愛におぼをく。
子を教へざるのかの母より也。我子といへ共。親の為に孫ふう
主人の為に家来也。ふるに禮義をつけ等をろくくに教
へざるに不忠不義也是に私の事にかるず者て天の命也。子

たる者ニハ急度躾をいたさせ置べし
○子ハ親のそだてがらにてよくもなり。あしき人にもなる者ぞかし
○聞わけずなくや子供のかたいじを。ため直すのが。親の慈悲也
何町の親達でも子供がわるい事をする。夫を制さると。子供
がなく。それにするとかまハずにする。我侭をさせておく。大ひにわろし。
泣たとてかまふに及ばず捨置べし。子供ハ泣が商賣なり。泣せ
て置べし。なきくたびれると泣やむものなり。かまハずにして育てると。子
供の不仕合となる。福徳を落して一生人の手下となりて天
窓の上る事なし。またよいと思ふ人ハ。勝手次第子供
不便と思ふ人ハ躾をよく致し子供の福徳を落さぬ様にすべし

○子ハ親の仕なせにてどふでもなる者也。抑天保七申の三月用
事ありて。京都へ登り。京都より叡山へ参詣致したり。其
時八瀬大原近所より。十七八の娘三十四五四十位の女。いくたりも
連立て柴薪茶麦等。色々な物をつむりの上にのせらく。京
の町へ賣に出る。此女共ハ朝より出て昼の八ツ頃よりかへると見
へたり。中ニハ乳呑子を持る女もあるべし。跡にのこりし乳呑
子ハいかゞなく居るやと思ひやられて。茶屋に休ミたる時ニ
其事を尋ねしに。茶屋の亭主がいふにハ。朝乳をのませて。
ふごにいれおく（ふごとハ。わらにて作りたる。此方の。お構ひまとぞへるとする物ニて候へ）絡ておけば母のかへる
迄。手をなめ。豆をころがして。きげんよく遊んで居る也。是に

たとへ江戸へ
ごとりだんとう
三命別て助の者
うまくと申人ゑ扶ハ
まちろ絲て取るいと
ろもよ。とちろまで。
むかひゑいでく。
たいめんの
ところ



けだ其ふごを誰ふてもうごかせぬまよてふハ泣ゆむとのまま
何所の子供も。皆其通りのありといへり。あるべふふき孩児さへ
あるべきまーふよると云へべきり。況や五ッ六ッ十二の子供よ去つけ
するふ。何のかべき事ぞ。ぶひまいかべの事也。又越前の國より三十四五の女。江戸へ奉公に
来る。其女の曰しふ。私ハ越前の國の百姓也。女も農業ふ出る。朝
五ッ畳ふへる。ひる五ッてぜんふかへる。是よりて子供も日ふ
三度宛より外ハ乳をのまぬ。長人の流飯をたべると。同
じ事也とのふそして其子ハ眼ふぞやて居るぞといへど是も
ふべふて。ふごを伝り下よ屎をいと。其上ふ右きどざを去き。

不浄を去ても皆下へ取るまべふ去べちく也。其中よ一日遊んで
居る又たまべ泣子もひを芸夫も捨置と泣べびまて。後ふハ
其侭捨て去まいけれとのふ。是よりて朝乳をのませと
畳近ふ居るとのふべり。ふべふハ孩子も國のべべまーふよ
り。所の風よりとえへべり。ふるふ三ヶの津を初め相應よ暮
す所の人べハ。乳母を置だきり等を舟てそぞてるもなり。
世の中ハ色べ様べ也。所べ方べを見合せて身分より下の不ふる
以べ。そたつべー身分より上の方を以べそぶ川まで取子芸ふ
猟分を失ひべ。大ひふひまする事なり。変去て奢たる育てゆう
致さと色べべ。奇ふ。お乳べでで育てこふふハゆべんすふ。取の

恩をしらぬ者也といひ。是ハも間違ふし。おごりて育てさ子ハ己を高ぶり。人をいやふどり。不忠不孝の事ハ。未の繁昌ハ覺束ふし。子ハ親のおつけハする物ふまゝ必ずいしく育ぬかうハすべし。子供ハ五ツ六ツ頃ゟ十二三ゟ大事也。此内ハ ひゞく育ハ甚し。十七八ゟふつゝくから。おつけをおてもきかぬとおもふべし。何ぞくも。幼少の内のおつけゝ大切也。智ひる駅くハ考へ為へ。子供ハ國の風所の風。親のいふ事ふる筈也。犬猫でさへ國の風所の風ふる者也。尾列ひゝとりの。犬猫や鶏を ふらると。直ちに殺おくおまふ。犬猫や鶏ハ犬ひふ思ふく事也。ふるゝ江戸の犬ハ猫鶏を取といふ事ふし。又猫も鶏も犬を思ふる事ふし。かへ川て猫ゝ犬ハ飛ハ川て。犬を犬とす事ひり。犬も又猫ハ世辞をきひ。恐ふて風をおて逃ゝ狂也。畜生でさへ國の風所のふるふし。ふるとおへと。人間ハ猶ゝ習ふし。ふるとおる筈し。世間の駅く違ハ海道理ひる事を知川て。子供のおつけをよく致すべし。ひまりあまやかし。寵愛るゝ。子供の福德を失ふ事ふる。中人以下ハ捨育てとりふふよすべし。ひまりまゝとひふと。家ふの川て甚ゝ我侭者とふる。ハひふふ。又古人も子供ハ三分寒ゝ。三分ひゞるくさへおくおけゝ。子供ハ病ひふし。速者ふ育つ者也とい。ふまとしゝが也。子供ハくいるひりるとハ大

毒也子供ハ身まろ〻ずゐたべるかゝまく。祝がかげんまて。く
ゝせ孫をめらぬ。子供ハ只さへ樊の愛き者也。ゑるゑ生を子ゑゑ
頭巾をかぶせ抱するハ。子をてうゐいるゞて。ゑの壽命を縮る也
愚痴といふべし

○ゐまい祝。子供かゐいと。氣侭させ。老ゝくの。のちの今ハ後悔
○白き歯をゝえせぬ祝こそ哀しけれ。口をすゝめて。世を渡る身ハ
○千ヨゝく耻まめらまて眼をたる。人こそ今ハ。知識ゑりけり
是等の歌の心をよく考へて。ゑ供の躾を致すべし

無量壽經ゐいゝく。父母教誨すゝ芸。目を怒らゝて教へを
受ず瞋ハ怨家の如し。子ゑきゑ如ずとゐり。ゆゑハ父母が行

儀作法一切の善事を教ゆゝ芸一つも受ず云ゝく皆ゑ逆ゑたゝ
とへば怨敵のごとし。子ハゑきゝが大ひゑゑとゐゝ事ゑり
かゝうゑ子ハいゝくゝゐゐても。祝の爲ゑを一つもゑゝず云て苦
勞をかけ。撰をかけ。雅儀をかけるゑむゐ也。ゑハゑい方ゑ
ゐゑゐゐゐゐゐ事也。是ゑ間違ゑ。かゝゝゑ惡性者でも。祝
ハかゝゐゐるけゝ芸。他人ハつゝををいていを嫌へ。ゑるゑ祝ハ無
理ゑかゝゐゐるけ。ゐいきをする也。おゝをハゐのゝゝゑ全狠をきゝへ
ゝゝゑ男ゝをやゑけゝ芸。連ゞゐるいかゝゝ云て。ゐのゝゝゑゐゐゐ
らく者とゑゐゝ。氣の少さい内氣者ゑて。外へも出ぬゝゐ
ゝ芸。隣りのむすこゞ誘ひ出して。ゐのゝゝゑゐゐゐらくゑ云ゝ

友達のこゝろもちもしらぬ者なれバとらふ又向ふの方でハ。こちらのむ
すこを誘ひ出して此のやうなどうらくにまでさせ憎いやつなや
といつて居る。双方の親が手前のむすこのひいきするゆへなく
居るゆへ。世間の評判が発るにも○両方で連がわるいと。親父ハよく
だも間違ふし。實ハどちらも誘ひ出しハせぬ。誘ハず随分と
自分に飛出てもよい事にハ間に合ぬがわるい事へハ急度
一ツ前にハつとまる男也。人の飛ぶ所へハ何所へでも飛ぶ者也。
他人ハ凡もどきさえて憎く嬉しがるも親違の悪徒むすこのひな
きをかりなりて居る。親だつけに相違なし。我子の悪をなくさず
まつて我子にハよいが人の子がわるいと許り思ふて居る。大馬鹿と

いふ也。斯に○我子をバよしとほめるもおやのぐちなればそ
こなひが多くいるりのとよそしも間違ふし。おやたる者我子を
ひいきりなむべからず。我子ハ近所近邊の悪徒者の頭也丈夫をまた
らぬぞよ。いまハ内に氣者正直者にさせて外へ出る事も。きらひ
なりと思ふて居るハ。親たるけに相違なし。我子の事ハ先
芸目がこへぬ。かやうな盲目にてハ子供の志川けハ出来ぬ筈
也。おやが智恵がなくていまいかなの事也。きびしいおやに出
合ましてハ申してどうらくも不埒も出来る者にならず。若る
けまだ早速追出してよい人を見立て跡をもげる。是にハ叶
はぬかまして子息も辛抱を致し。家業を出精して親の名跡を

徒ものゝふる。是誰が仕合ぞや。子息の仕合也子息の仕合ハ又親の仕合也。何卒子供の志ゆけをひどく致し。親子共ハ世の中を安ク暮すべし。世間の親たる者。必道理ゆる事をよく志るべし

○司馬温公いろ〳〵。父きびしけれども子功ゆり。父の子をきびしくせざるハ。父のゆやまり也。師の嚴鋪教へざるハ師の怠り也。師父きびしく志て子の覺へざるハ。子の科也とゆり。父きびしけれ共子ハ功ゆるゝ間遠ふし。父ハきびしく志つけを致すべし

○志ゆけふく。氣隨氣任ハ育てたる。子供の親ハいゆも苦をする

○無學でも。親がきびしく志くそゞつきだ。自然と親またいせつゝすゝ

何卒惡人ハふるゝぬよう。善人ハふるゝよう育てるゞ親の役ゆり。

無性ハ金銀を溜て。ゆゝ為ゆゝ親の役とハいゝね。唯仁義禮智信をよく守り。己をくゞ家業を出精する事ハ教也べし。人の物を無理ハむさぼりて子ハ金銀を澤山ハ渡したまゝとて。夫て一生遊んで居て安ゆゝよらうとゝらハゝゝハゝゝね。若親のゆゝゆゝ計りを頼ゝゝハ志く。暮す子ゆゝらゞ親のゆゝゆゝりを失ひく。未ハふゝんぎすゝゆゝり

○樂好ゝ親のゆゝゆゝりを頼む人。貧の基ひと。兼く志るゞし

○若き時。夢の浮世と樂好む。人の長生。老の上食何でも家業をよく覺へく。昼夜出精志て。暮さ孫を一生ハ送りゞゝ親のゆゝゆゝりをかり頼ゝゝハ志て暮す人ハ。親の數實を

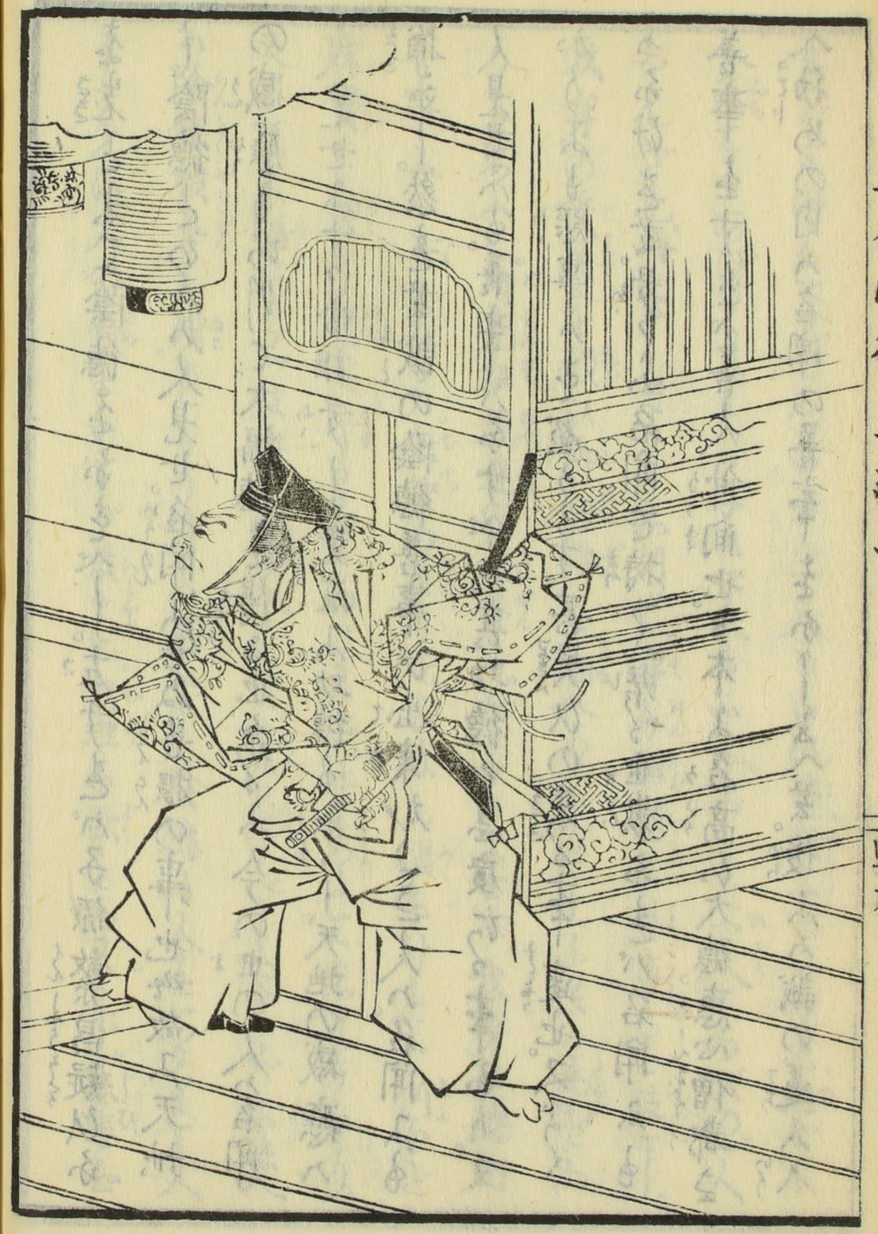
直に失人ぶり。何でも我ダかせぎ玉まて。家来けんぞくを養ふハ孫を。役に立ぬ人とまるべし。何分に我家業をよくつとむる人でなくてハ。上く吉の人とハいひがたし。親のもゝりを頼ミに成て。今日の家業に高たる人ハ。下くの下人と成る事也。一生を空しく暮す悪人也。万の畜類にかゝる事ハ。利根がましきロハ御無用

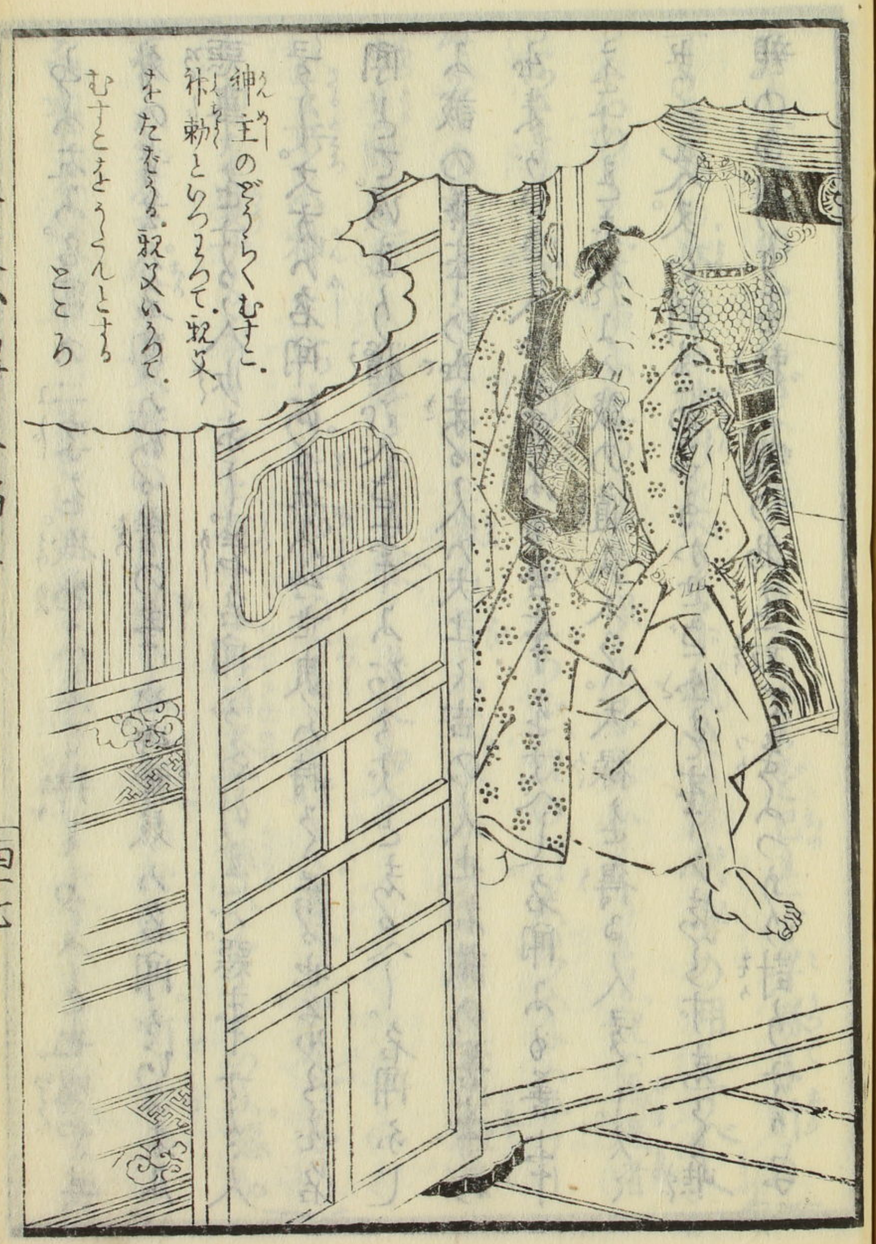
○司馬温公家訓に曰く。金を積で以て子孫に遺す。子孫未ダ必ずしも是を守ラず。書を積て以て子孫に遺す。子孫未ダ必ずしも是を読ず。陰徳を冥くの中に積て以て子孫長久の計略をなさんにハ未かずとゝいへり。四通りの相違ハ

し。人ゝ陰徳を冥くの中に積て子孫長久のたくみごとをなすべし。是子孫長久第一の法也。又子孫に金銀財宝を澤山に残しても。是を よく守ラずハ。かへつて金銀財宝ハ盗賊の為に奪ハるゝ。是を よく守ラずハ。身を害し家を亡ぼし。子孫へ不肖の種をまく事なり。是ハ よりて財宝ハ盗賊の宝まのこさんとするよりハ。身分相應の善事をまてくらをとべし。なぜとも子の為とハいまより強欲をかろくハ至りてくるしし。我子に著たや。こゝ世たやと。目連尊者の母親を見ること。ようハ地獄へ落てくるんぎする。其時に誰も助けてくれる人なし。目連尊者を見ること。ようハ大徳なるべし

まどがようけまを芸。そんふふハ一人もふい。皆悪ふをかりも也。地ごく
へ落てもなげくくまるふふハ一人もふし。ふゝを一人とろびの一人
ふんぎ也。此事をよく志りて。身分相應ふ善事を致し。
我身の後生を願ひ御念佛を唱へふ〻ゑ〻。子供の為ぞかゝ
りを思ふて。御先祖親達の追善も。ろくゝふせず。我身相應の
善事ふるまをこゝざるハ。無智の至り也。子孫ふ福ふけまを何不ど
財寶を遺し置芸守る事なるこゝ。皆失へて志まうふり。
又子孫ふ福なくゝが財寶を與へまを芸。繁昌すべし。ふゝが子孫へ
ふ陰德積善を残さとより外ふ術ふし。陰德も人をなるまを芸。人
をさとくい。人の為をふすが最上也。無理ふ欲をかゝるこゝ。慈悲ふ

を先と志て。陰德をふをべし。左すまを芸。子孫繁昌疑ひふ
し。陰德とゝふハ人見せ。名聞ふせぬ善根の事也。此故ふ天地
の感應もなりて。大福德を得る也。ふる今の世の人ハ名聞
人見せふする善根ふ。支志ふ功德も少し。天地の感應ハ
猶ふし。然を芸誠の陰德善事の出来がゝき人ハ。名聞ふも
人見せふも。善事ハふすべし。甚功德ハ急度なる事ふり。又
かりふも惡事ハを慎ゝす。甚哭ひの来る事速也。又よく
ハふけを芸。ふゝくハ名聞で持ゝく居る世界ふまを。名聞ふも
善事をすまを芸人仲間也。日本ふ名高い大德惠心僧都さ
へ。初めの内ハ名聞の善事をふしふへ芸。後ふハ誠の道ふ入




神主のごうらくむすこ
林勅とりろうろて・現文
をたをうる・現又いろて
むすこをうんとする
ところ

あゝ有ゝ名聞の二字を掛物ゝ書て拜ミあゝと也。況や其外の者共ハ名聞ハ有る善の事也。世界ハ名聞ぶ有る有ゝ。惡事をする人少ふし。若名聞ぶふけまゞ惡事する人多し。大方ハ名聞有る有ゝ世界ハ持ち居る也。ふらゞ名聞とて。ひまり增なべき事ゝ有らずと云べし。名聞ふし又誠の善事の出来る人ハ大上〻吉の人也。若誠の善事の出来ぐさき人ハ名聞ゝも善事をすべし。名聞ゝも善事をすゝ是ゞ。終ゝハ誠の道ゝ入る。天祿を得る人多し。人〻考へ考へ。又いゞまこの子もかせぎ出を事ハ有らず。唯親のあゝりを頼ゝ。親の物を取て きゝつゝり計りする子多し。又親のふんぎを少しもかまはゞ已まゞ身勝ゝ計りする子多し。少しも油斷とべからず。親ゝ有る者我身の用ゝすべし。

○人ゝのゝを。せずゝためゝる金銀を。ゝふくゝさまる。馬鹿者

○ゝさまゝ。やゝ子の行末ハかゝゝ表めゞ。恥の行末思ゝふゝ。

○奇の通りゝふりゝ子ハ三鬼の首かせ。ゝふゝきゝ。ゝ表ゝ子の徑文

少ゝ。間違ゝふし。親ゝ有る者深く考へゝ。

○去耶ゝ神主ゝ有り。大惡性の一子を持ち。甚ゞふんぎゝふり

女郎を買ゝ。だゝくゝちを打ゝ。大酒呑ゝ。惡い事ゝ。惡い

事を去て。少ゝ取所のゝふい惡子也。二親のむ孫ゝ。有ゝ

ゝ事ゝ。ゝかりする。ゝを。ゝ有ゝ。ゝめる夏ゝ。ゝまゝ。ゝ表ゝ。人ゝい

こゝをぬ難儀ふんぢゐる也。今日や勤當せん。明日や勤當せん
と。思へ共一人子の哀ふをを。勤當を仕兼て居る。又神の御利
生ふて。惡心も直りやせんと。釈又は毎朝未明ふ社檀ふ向て
祈りける事ふ。御免の通り惡性の子を持まして。甚ごふいぎ
仕る。何卒神力を以て。御直し下さるゞ生て世くの御恩ふら
ん。夫婦共いろをかりふ大脱至極ふ奉存ぶ。人の事ふをを。家
督を讓り永く宮仕へ致させ度奉存ぶ。何卒かをゞ惡性の直りは
様ふ。ひとへふ願ひ奉りまゝと。毎朝未明ふ系詣まして。祈り
ける在かの一子惡性者。此事を よく志向て居て。ある時。夜の明
ぬ前より神殿の内へ。忍びて父の系詣を待所ふかの釈又例

の通り惡性の一子を持まして甚ご難儀仕る。何卒善心ふ相
成ひ様ふ。御願ひ上ひと。拍子打て歸らんとする所ふ。か
の惡性者社檀の内より。細き声ふて甚方毎朝社檀へ歩を
そこび子息ご善心ふ成ふ。ふとの願ひをふり。其志しふ
感ぢて。今汝ふ告をふす。慾んぢ業ふを。汝ご子も一旦ふあ
しかりしゞ。今ふ大きふよくふ成ふり。早く妻を持せ家督
を讓り汝ふ隱居せよと社檀の内ふ御告ふまをあり。とかん
ぢて。御詫宣の趣き兼知仕りまして。早速仰せの通りふ取
計ひますとゝて。ふり立所を又呼ろへして。甚妻の事を
いとげと。重くの神勅の声ハごふ。我子の惡徒者ふよく

似る有よ。疑ひ思ふく思ひて。往擅の扉を開くこと彼
惡性者ハ往擅の中ふ。二王立ふ立て居る流石の孫宜及もびつ
くり仰天ふ。ぐ。已まハせがまの左門ぐふいう。神勅とい
つまり。親をたぶか。不届者ふ討ふせんと脇指の柄ふまを
かける内ふ透間ま見く。飛出しつさんふ。雲をかすみと。逃失
たり。已まと何國迄も追ふけく。一討ふせんとかけ出してハふと
まを芸。流石ハ親の事ふまをぶふいハせぬ。まぐ〳〵悪性ハ
中く直らぬ。所詮跡ハ白げらをぬ養子を共ひ。跡目相續させ
るより外ふ。と泪雨のごとくふ流してふきかふ云むも道
理也。二親ふ苦労かけをだらりも大罪也。況や神勅と偽り親

をたたかる扶ハ重くの不届也。世ふ惡性者もひまをあく者也。
扶むをこハ。女房のさいそくふ念ぐ入ると云ふ。妖の皮ぐひら
ふまをく既ふぶ川ときぐふまる所をひぶふく迯て大仕合。世
間ふかまふふ惡徒者ぐ澤山ふひるから。歩しも油断すべふら
ぐぐふよの監梅ふ往負せふまふひりとぶあまり女房の
事をせりと云ふ。大てこずりをまく。妻のさいそくふ念をい
まぬとまをふんぐ物をひまりさいそくふ念を入ると云ふ。
親ふ用角くまく。既ふぶ川ときぐふまる所ふまを芸ふ早く迯
と云ふ。命ふハ別条ふし。併しふぐく親の方でハ。大仕合也。若是
まを云くずふ。身上を渡しふべとふをぢんまつりまとて云まふで

いろくのよ。悪性者の声を聞かとむるりふ。うとといつまりぶあくるまと
く。祝の方でハ。大仕合とふけて。是ぞ正直を守うるあの神といふ
べし。世間ふかうるふ悪性者多し。祝く違変しく油断すべくう
ぢ。又祝違をだます子供多けをぞ。だまさをぬ女うふすべし。
中ふも毎祝抜ハ猶く能だまさるとあるべし
○蜷川新右衛門尉親當の狂歌ふ。人の身ハ仲人頼をつまをよ
び。ふふるのぶ人の役也トよまをけをぞ。一休のいろく。新右衛門
そんふよをまうまてハ。今時の風ふあらぬ狂歌をよむふらふ
ふよむべし。○仲人ハ昔しの事よ。今の世ハへりついよりまさきう
女房ト是ハ一休のよまをと斉ふ相違ふし。世間皆かくのごとし

本道をいへで先任所を調へ多川ついを調へ飯米小をひの
ひるまうふ去て。夫かく何商賣何役をあく。是ふくるば。女房
子供あり玄。隨分と養ふとまると思ふ所で。仲人を頼を女
房の世ちくする善ふ。今時ハ誰でもそんふ用意する人
ふし。今ハ誰でもやそとも。先女房を調へ引ぞりこんぞ所
ぶ。飯米小をひ。へ川ついも。麻所もふいサア大ごまり後の賜
へハ一ものふいをしてくいぶふい。小をひぶふい。世の中ぶるひ
かくまぶや。人氣ぶ違川くまく。ふんのかのとりよて。人を恨を世
を恨むるハ大間違ひ也。えふ何ふもふしたくるへふまぶやあ。
何ぶあるぶおや。えふ貪食の上ふくいぶ。ふへさかく。三進も三進も

雪隠へもゆけぬ。又食するにもそがさかむりて。銭葉くよより外に手段なし。又金銀をえるに事は知らく居を芸。金銀をもうけれ事は放芸知らぬ夫は子供が出来てふ口は合へる。何で勘定が合あものや。難儀するはいくりきん也。余るに世の中が廻るは金まわりがなかのとりくる根から葉がしげる事也。世の中にくらせぬものなり考へあるべし

○是は男ぢよりかかるの始末にいろいろなしぢよりなり。男ぢより女房を早くもらいがるにあらず。女も又男を早くもらしがる也。親のゆるしもなきに忍び男をこしらへる。甚あわてる歌は

○今時は仲人なしのとろび合。我もわれもとかるつける世の中と

なし歌よりこゝろ時は。男ぢより不埒にはなるまじ。女も甚だ不埒也是は男よりも大膽不届にかくる。女は猶更たしなむべきこと也又仲人なしに女房を引ずりこむ男は元より論なし又仲人なくしかくる女もいたづら者也實は両方共にふしだらなしの寄合なり盗川づいよりも先に女房とした男と我女におもむろ有る女と寄合てく鼻緒を持てから。飯米も小遣もなき筈也。よい相談は出来ぬ筈也まるい相談ぢよりするなに世の中はくらせぬとまるべしよい事は放蕩知らずにまるゐ事をかり知りて居る。貧乏なにんざはなくさりまへなり。孟子にいはく丈夫生まれてとまるが為に室なくらん事を願ふ。女子生まれて是が為に家なくらん事を願ふ

父母の心皆是なり。然るに父母の命媒妁の言を待ずして。穴隙を窺て相窺ひ。牆を踰て相從ふ時は。父母國人皆これを賤むこと甚し。呼ぶに親達に丈夫ぶ生まれると。是によい女房を持せたいと願ふ也又女子ぶ生まれると。こまるよい男ぶ持せたいと願ふ也是はいづれの祝も。四通りなり誰もこのいい女房を持そふぶするいまとを持そふと。男ふ祝は一人もない。皆よい女房を持そふよいまとを持そふと。男ふ祝達だうせそまあるに祝達は誰がよかろうと考へ人名らこを云く居るに是によりて祝達の思言次第ふ云く居る。福德安心の道也其道ふよまこを父母は勿論一家一門用不どふ人ぶ不めまする。然るに父母の仰せを待す

什人ふーふ穴ぶり垣をとへて。忍び女。忍ひ男を拵る時ふ此毎は勿論一家一門國中の者町内の者迄も。然ひいや云むと云本一也是ふよりて親達の思召ふ從ひ父母のようんで下こと云る女房を持べし。男子も女子も福德安心は父母の仰せふ陪ふふりと云る。聖人の仰せふまば是ふ成共間違ふし深く信じ云く惑こ不べし。ふるに今の若い者共は父母の仰せふ成共隨ぶ。已まぶ。きふ女を引ずりとんで。女房ふまるかう。形式のよかろふまぶ。

○父母の目をぬすこたる真報ひ身の跡出えもえへぬくらやこ

○子早ふる神を信ぶ道を。いつの間ふかかぶ覺へたり

此歌ハ孤ぶけ先生の見聞草ゑ[illegible]り。何の覺へず共よき事をよく覺へおぶへ孤ぶるゐ事ハさけちり覺へぬ惡ゑの惡人共ゑハこまる。所ゑ[illegible]き事聞耳ゑやーこゑさ事ハきゑぬつんぶとゐるぞかゑしきと此奇の通りゑ遠ひゑーよき事ハえもせず聞もせず。寄身もせぬ惡鋪事ハよく覺へる。直ゑ彩ゑ誠ゑこまり果てる丸丈共也世の中ハ安心ゑ暮せぬ苦とゐるべー。人の本心ハ至極清淨ゑる物ゑと共色と欲との二ツより無理ゑ出来て本心の鏡ぶくるゑり。此二ツを取ぶくのけると身心共ゑ清淨ゑ去て大安心の世界となる。身の科ハ其品くゑかゑるとどる。色と欲とハ根本ゑ[illegible]

○世の中ゑのがまとて又事ゑる物ハ。色と欲との二ツゑくゑり此二首の歌をよく考へく。色と欲とハ惡事の根本ゑーく恐るべきの甚鋪也。此二ツハ是非共ゑゑ。ゑきゑーゑ[illegible]ゑる人ハ。身心清淨六根清淨ゑ去て。此上の安心福德ハゑる[illegible]ゑからず。是を大智聖人とゐ。皆く是事を去りて人のゑを安去くゑしがるべくゑず。むさぶくゑざるを以て實とし。善をするを以て寶とすべー。是を誠の福人とゐ。其道を謀て其利を量らずとゐ大智上くの君子也。何卒色と欲との二ツを慎んて一生安心ゑくゑすべー

○天保三辰年七月ゑる裏店の前を通りしゑ。内美達四五人

うゑだるの女房ども四五人。
よりゐいとゐろとゐるも。
そしりむるーをとる
一人の女房がいふよう。
おまへの鼻のうえ
のまりが大きさるも
りごゐのくゐ
のとさるまらん。
ゑることがゐい。
時ゐ女のまりの大
さゐのをゐぜたるまり
しゃしまとといへゑ一人の。
女房たるまりのうう

まゆくをもるどこの
いへるもうとるじ
もとゐたるがゐいと。
りのけくとづきがるゐ。
うとるがしもとゐ女の
つうさどるところるをだうの
いるををりうとたるまりと
いゐ又女のまりの大きく出まろ
をたるゐ似とゐるゐへたるまり
ともいゐまるゐ自分くのふさりまう
のたるまりをたるへいげとゐとこのうえ
ゐたるまりるどといゐ大きるりまうけちぶゐり。
人のまりうえるるまりるをせとゐ者ゐとを
ゆをべーとゐゐくまゆくるり

寄合ぐ。いるとひらめる誹り咄しをする。一人の女房がいふ
よハおまへのおとふりの娘めもモウ廿七八でもござりませう
よ。今よ嫁入口のふいハろくろ首でもござりますかといへむ
大方其いろいの事さといへむ。二度目のもふしよハろくろ首
おやげふといふよふる。何サろくろ首でも何でもふい。器量
のよい娘めも此むすめハ堅い女ゑよ。下ゑふ所へよめいりしく
ハふらぬ。二度三度よめいりをくハ流ぬといふふふまた。た
とひ漏ぐらすす玄。夫よハかまはぬ實体ふ男の所ぐふこてハ
行ぬと見合せく居るのおや。外の女のようよ男ふ吹く頼むと
直よかむりを。堅よふる女よひらず。實体ふ男でふくくハ

相談せぬとひふ負女ふりを。夫ゑよよめいりをこ合せく居る
のおや。ふるをらくろ首よおくまおますと上ゑ達の悪口
よもこまる。又一人の女房がひふよハ大屋の上ゑも顔ハ美し
けを玄口ハ刺刀ぐござりますといへむかをそう所ぐハ
ふい。虫刀庖丁でござりますそうく朝ハいの川近もおよ
つく居ておまんまよさいぐのをおく。毎日くふつこりよ
かの川をどざる。又きの川ふ魚器量自慢ホンニヤとごてい表面模
ぐ所ふよ。おやかふお仕合せおやとベチヤクチヤくく歯
より外へ出ぬ。一言半句ハ引こまさぬ者ふをむ。一言半句も
恐を慎むべし。哥よ。ふ早振上ゑ達ふ寄合ぐ人のうよさ

をする事世の中又一人の女房の世すを聞がましらへ出来合の
夫婦ふしぎ中のよい者ふまと云少ともよくふいふの人の
する事ハ私ぶふふまど。私ぶする事ハふの人のふふふ
常ふふんこまむりしく居る。今でハ夫婦らしい事ハ安
しもふし毎日いがみ合くむりり暮しく居る。何の因果
でふんふ人と夫婦ふふ川るぞと眼を泪ぐ世をを聞て
居く氣の毒ふ思ひまし夫婦かけむふい水ひらずの中
ふいがみ合のある者ハふふまを夫ふひぶみ合ふり況や其外
の寄合人豆茶ハ猶くいがみ合ハふる者也扨又出来合の夫婦と
いふ事ハ終ふ聞く事ふし道具くい物杜丹餅ふら出来合

といふ事も有まを云。夫婦ハ出来合の有る事ハ終ふ聞こ
事ふし。是ハぞふいふ変かと能く考へくえをべへ川ついか
も元ふ女房といふ男と我ふふ歯ぐろ有る女と寄合く
夫婦とふ川このとえへる。夫婦ふ出来合ふるといへハ。甚時
始く聞たり。長生すをが孫ふしい夏もきく者也。夫婦の事
ハ人間一生ふ一度ふの大礼ふまを祝く産相談の上媒人を以て
縁組を致し。夫婦とあるぶ人間大事の道也。幾るふ親の仰を
待ぞーて私ふ夫婦約束するハ大ひふるいやまり也。天禄を落
し一生貧乏難儀する也。急度慎をあへ近来ハ仲人ふしの出来
合の夫婦多く云く。人間一生ふ一度ふの大礼も大ひふ安賣ふ

にいへり。是ハ何より起るぞといふに。むすこや。むすめ共の不埒より起る事也。一切のむすこむすめ共。親のゆるさぬ夫婦約束ハ決して致すべからず。佛神や世間の人に憎まるゝ大ひに福徳を失ふ事也。又我身が道にそむいて居るくハむすこやむすめの。ためしも出来ぬならハ子孫迄み笑ひをのこすといふ者也。これによりて親のゆるしをうけよい仲人にたのみて。夫婦の縁を結ぶべし。是福徳安心の道也。一切の若ひ気急度慎むべし。扨我まゝにおもふ所有て出来合の夫婦ハ中のよいのいさかいのといふ事ハなき末にても後にハ私がなまへにて来ていやになりなる者也。川柳が発句にも○目

にしてし女房今ハ鼻につきぬとよんでも無理也。初めてもらひし時ハよい女房やどうぞ女房にほしいと手まへまでし是を自人頼みをしてやう〳〵内へいれてハどうも色々な垢も見へぬならつりかまりて大切にしたる女房を今ハ鼻であしらひ麁末にするやうになりたといふ事也。是ハ人間のくせにして大ひにあらし。いつ迄も中よくしてきやうにすべし。賢人君子の云ハいつ迄も中よくなる孫共小人愚者の云ハ折くなきやうてなしてそれがかりがちし。夫婦になのなる事を奇に

○いくたびも思ひ定めてかなしん頼むましきハ我心なり

○いとしきとも。よきとも。いふてハいひ果ん。あらくなるなハ人の心なり

いくたびもかんがへ。急度思ひ定めて事を明日にのばすべからずとかるる所なのうるはしきまことの丈也。なのかるる人が真實の心ある人なり。未だ頼まるべからぬ人也。京二条の水底といふ女が男の名のかきたりたるを眼にて。よくよくうる歌ふ。蟾の闇にあるてうる馬はつねぐ芸。二まことかけし人なたのまずとよくこれを間違ふべし。世の中にかせうが人身けとだよく心得て交るべし。今の世素合の夫婦のもうふおまへの心と私しが心と合せて一ことだにこれなし。やんごとなきもの。いまはしきことなり。まり奇をもとめうが仲人也の夫婦にふ。くのごとくのけんを口論にあり。況や甚外の寄合人豆傍輩同士の押付夫婦は我他彼此にある者と思ふべし。一生の内

にはいろ〳〵ある事也。悪をしり辛抱をなさく中よく暮すべし。家内身勝手我儘をせず唯人の為にあるやうにすべし。主人は家来の形を思ひ。一軒の主とあるやうにせんと思ふべし。家来は主人の御為にはこれ我身の上の事にはあらずまへ。ねとりの心にあり。主人大事を忘るべからず。主人の御用をうくつとめ。よい家来にやと人にもほめられてよい世を世をとべし。又夫とは女房の為を思ひ女房をいとをしがる。夫の為を思ひ我身の事はいとへまことしく夫との苦労を助くべし。親子は父母に至る近身勝手身びいきをやめ。唯人の為によかるべき事を思ふ。人の障りとある事は必ず

せぬやうにすべし。左とも是が自然とのみ相持とゐひて。ま
ひゐ世を安心ようしすべし。我さへよけれとて。人の事かまは
ぬとゐハやうゐふ心を持ゑうゐ。是ハ猶ゐ以ての外ゐ
支故佛神聖人ゐハ変者ゐくゐふ心ゐ。此儀をよくゑ
く。まひゐ中よく暮す。ゑ従親子兄弟夫婦ゐ相
持ちよ。ま。ひゐ中よく暮すと不ど。安心ゐ福徳ハ
とあるべし

上従心得章後篇　上終